

マリンスキー劇場で行われた、プレ・オープニング・コンサートから。右から、芸術監督レーピン、チェリストのミッシャ・マイスキー、ピアニストのコンスタンティン・リフシッツ。豪華な出演者も芸術祭の魅力の一つ



REPORT

レーピンが熱く語る「芸術を通じた友情」

ノヴォシビルスクを超えて広がる トランス=シベリア芸術祭

ロシアのほぼ真ん中、ノヴォシビルスクで行われている、ヴァイオリニストのヴァディム・レーピンが芸術監督を務めるトランス=シベリア芸術祭も今年で第3回目を迎えた。どんどん広がりを見せる同芸術祭だが、今年はシベリアを超え、サンクトペテルブルクや日本など他の地でも行われる。

取材・文=中 東生
Text=Shinobu Naka

Photo= Trans-Siberian Art Festival 2016/
Alexander Ivanov

ノヴォシビルスク近郊から
演奏会場が各地に広がる

この記事が皆様の目に触れる頃には、ちょうど待望の「トランス=シベリア芸術祭 in JAPAN 2016」の真の最中であるろう。「この地方出身者の中で一番有名な人物」と、^{*}ノヴォシビルスク市立「シベリア・北海道」文化センター副館長が言うヴァディム・レーピンが、「故郷をもつと世界に知ってもらうため」大切な音楽仲間たちと自分の故郷で集えたら……」と芸術祭の構想を練っていたところ、新しいコンサートホールが建つ運びになり、そのタイミングを逃す手はない、と実行に移したという。

広大なロシアの真ん中に位置するノヴォシビルスクは、かつてシベリア鉄道建設中に誕生した街だが、第二次世界大戦後、一都市集中型の開発は危険だと認識した当時のソヴェト連邦政府により、国の研究機関等を発展させる狙いで再構築され急成長した。雪が少なかった今年も、例年よりも街中の砂埃が酷いというが、整備されていない道路や、壊れたままの建物など、必ずしも裕福とは言えない街に、立派なおペラハウスや美術館が際立つ。その中でも新しい輝きを放っているアーノルド・カッツホールに集まって来る聴衆を見ると、市民のパワーと旅人に対する温かい歓迎の気持ちが感じられる。

芸術祭1年目は、ノヴォシビルスク近郊だけだった演奏会場が、2年目の去年は開催地がシベリア中に派生し、今年さらに広がりを見せ、3月11日にサンクトペテルブルクのマリンスキー劇場コ



ノヴォシビルスクでのオープニング・コンサートから。右からインキネン、フォーサイス、ズーカーマン

ンサートホールで行われたブレ・オープニング・コンサートで幕を開け、ロシアの後はイスラエル、韓国、日本ツアーへ出るまでに発展した。

そのブレ・オープニング・コンサートでは、昨年の第2回芸術祭に参加して好評を得たヴァイオリニストの服部百音がさらなる成長を見せ、当芸術祭の話題となっていた。メイン・プログラムは4月8日にクラスノヤルスクで始まり、プロコフィエフ生誕125周年記念のプログラムが披露された他、今年はシエイクスタピア没後400周年、メニューイン生誕

100周年も重なり、前者にはヘンデルやバーセル、エルガーやブリテン等イギリス音楽と、シエイクスタピアの戯曲が織り成すプログラムが、後者には室内楽プログラムが献呈された。

メイン会場となるノヴォシビルスクでのオープニング・コンサートの豪華さはこの芸術祭の目玉公演として定着しているが、今年も、ヴァイオリニストでヴィオリスト、指揮者でもあるピンカス・ズーカーマンと指揮者のピエタリ・インキネン、チェリストのアマンダ・フォーサイスとその期待に応えた。その他、グレン

タ・ガルボとジョン・ギルバートの無声映画にギリシヤ人作曲家アフロディテ・ライコプルスが曲をつけ、レーピンに捧げたコンサートもあり、必ずしもクラシック音楽ファンでない聴衆も惹き付けるプログラムを提供していた。

教育への貢献に力を入れる

この芸術祭で特に力を入れているのが、ノヴォシビルスクという街の性格でもある教育への貢献だという。子供のための子供のコンサートはその象徴的な演奏会であった。嬉々として着飾った子供たちが、続々とホールに入って来る様子を見ると、この街の将来が明るく感じられる。ノヴォシビルスク・アカデミー交響楽団の演奏するベートーヴェン「エグモント」序曲」では、女性のコンサートマ

スターが際立って上手いと感心している。次のサン・サーンス《ハバネラ》のソリスト、19歳のオレシヤ・スコロホドであった。

続くベートーヴェン「ピアノ協奏曲第3番」では15歳のユリア・ペランが、確実な技術に裏付けられた粒揃いの音で、落ち着いた演奏を披露した。その後は、13歳のダニエレ・アクタがイスラエルから参加して、身体の底から演奏する喜びに溢れているハイドン「チェロ協奏曲第1番」を聴かせ、会場全体を幸せな気分にした。

舞台上でレーピンからノヴォシビルスク・グリニカ音楽院に補助金目録が渡された後は、14歳のムルトウザ・ビュルビュルがチャイコフスキー「エフゲニー・オネーギン」序曲」を立派に指揮し驚かされたが、ソ連時代の国民的人気歌手であり、現在はアゼルバイジャン大使のポラド・ビュルビュルオグルが登場すると、彼の子息であることが判り、納得させられた。オーケストラはノヴォシビルスク管弦楽団に交代、大使自作の歌を朗々と歌うと、会場中が一同となって、体でリズムを取りながら、懐かしいメロディを楽しんでいった。彼のお陰で今までにないほどのアゼルバイジャン・コミュニティの子供たちがコンサートに足を運んだという。

プロコフィエフ・プログラム

「SPRKFV125」と題されたプロコフィエフ・プログラムでは、リオ・クオクマンの指揮で演奏されたが、力み過ぎていた指揮がなめらかになると、ノヴ



イスラエルから参加した13歳のアクタ

オシビルスク管弦楽団の美しい音色と、幼でもまろやかな響きが光っていた。「チエロとオーケストラのための交響曲」ではチエロのアンリ・ドマルケットが表情豊かで色合いの幅が広いチエロを聴かせ、オーケストラと対話しているような共演だった。続く「ヴァイオリン協奏曲第2番」では、チャイコフスキー・コンクールで多くの聴衆を味方につけたクララ・ジユミ・カンが、自然に流れる音だけで至福に到らせる美しいヴァイオリンを歌わせた。このソリストたちは別のプログラムで室内楽も聴かせ、底力を見せた。

締めめの「交響曲第7番」は、ロマンティックで美しい大きなフレーズを持続させた素晴らしい演奏だった。

今回の日本ツアー訪問地の一つである札幌は姉妹都市でもあり、レーピンが熱く語ってくれた「芸術を通じた友情」が彼の大好きな日本で、より深まることを願って止まない。

*ノヴォシビルスクと、その姉妹都市である札幌との相互の文化理解促進のために作られた